

アブドッラティフ アブドッラ

元プロテスタントの米国人（前）：イスラームについて学ぶ

:

明:

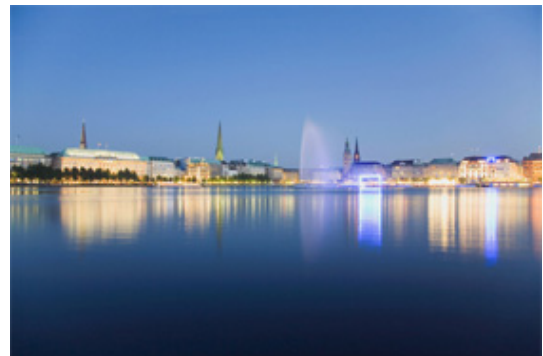
いかにして彼が学生時代、シラットの匠からイスラームを学んだか、そしてそれが彼の日常生活にどのような影を与えたのかについて。

目: [事新改宗者ムスリムの逸 男性](#)

より: アブドッラティフ アブドッラ

日 02 Sep 2013

集日 02 Sep 2013



私とイスラームとの接点は、1998年にニューヨーク市で大学院生だったときが始まりでした。それまでは25年、プロテスタントのキリスト教徒でしたが、きに渡って 践的だったとは言えませんでした。私は「スピリチュアリティ」により 味を抱いており、宗教とは何かを探していました。私にとってキリスト教は的外れで、今日性のないものでした。そこからは、日常生活に活かすことの出来るものを いたすことが出来なかったのです。キリスト教との は、 性 明白性の欠如といった点において、それらはどうせ同じようなものだろうとの私の思い みから、宗教 と称するすべてへの忌避へとつながりました。

私のキリスト教への不 は、神の性 、そして神と 人との における知 の提供の欠落から来るものでした。キリスト教哲学は、一方では人でありながら、同 に神でもある、仲介者としてのイエスと私たちとの奇 な に根ざしています。私にとって、こうした 解かつ非常に漠然とした 造主との は、神との 神への理解をよりよく提供する他の何かへと向かわせたのです。なぜ、神へと直接祈ることが出来ないのでしょうか？

なぜ、すべての礼 を「イエス キリストの名において」で始めなければならないのでしょうか？

全知全能の 造主が、人 の姿をしなければならない必要性とは？これらの疑 は、どうしても解消することの出来なかった内のごく一部に ぎません。それゆえ、私は事 と知 に基づかない空虚な教 ではなく、真の きを人生に提供してくれることの出来る、 刀直入なアプロ チをする宗教を求めていました。

大学院に通っていたとき、私には格 技を学ぶユダヤ教徒のル ムメイトがいました。彼と一 に住んでいたとき、彼はイスラ ムの教えに基づいた、シラットと呼ばれる拳法を学んでいました。ル ムメイトがシラットのクラスから ってくると、彼はシラットの独性や、 かな精神性について色々と教えてくれました。当 の私は格 技に 心を持っており、彼から いたことに 味をそそられたため、ある土曜日の朝、一 にクラスに行くことにしました。当 の私は づいていませんでしたが、私のイスラ ム体 が始まったのは、1998年2月28日の日の朝でした。私はそこで、イスラ ムの基本を 介 指 してくれた 匠のチッグ（マレ で教 の意）Sに出会いました。私は格 家としての人生を むことになると思っていましたが、1998年のあの日、ムスリムへの第一 を踏み出すことになったのです。

当初、私はシラットとイスラ ムに 味津々で、 匠とは出来る限りの を ごしていました。私とル ムメイトはお互いにシラットについて情 的で、二人で 匠の家を れ、彼からの知を最大限吸 しようとしていました。 、私たちが1998年の春に大学院を卒 すると、その年の夏を 匠夫妻の家で ごしました。シラットの知 が えると同 に、シラット の前にはほとんどなかったと言って良いイスラ ムの知 も えたのです。

何がイスラ ムの初体 を 烈なものにしたかといえば、私はそれを学ぶと同 にそれに基づいた生活をしたからです。私は 匠の家で学んでいたため、敬虔なムスリムとの共同生

活は、イスラ ムの音、 践に常に まれていました。イスラ ムは人生の生活 であるため、イスラ ム的 境にいるのであれば、日常生活から切り すことは出来ないのです。日常生活と宗教を切り す 向のあるキリスト教とは なり、イスラ ムはその追 者がすべての事柄において神の崇 を 合させることを要求します。それゆえ、 匠との共同生活を通し、私は宗教としてのイスラ ムに晒され、それがいかに人の人生の指 を形作るかを直接、したのです。

私にとってイスラ ムは最初、とても新 かつ わりで力 いものでした。また、多くの面において非常に で、それが求める 律は理解し いものでした。当 の私はあらゆる意味で自由主 者だったため、教 的 制的なものはなんであれ、 がそれを作ったかに わらず拒否してきました。しかし、 と共に私のイスラ ムへの理解が深まるにつれ、宗教的教

### アラビア の「ディ ン」

のように えるものは、 造主によって私たちに提供された生活 であることを少しずつ理解し始めたのです。この生活 は、真の 足へのまっすぐな道であり、社会や文化が提唱する表面的な人生 などではないということ を に学びました。 は非常に であることに 付いたのです。人 にとっての最善の人生とは、全知の 造主以外に知り得ないということ に。

ニュ ヨ クでの最初のシラットのクラスから、私がシャハ ダを行った1999年7月30日まで、2つの主要な によって 成される自己 を行いました。1つ目は私の育った文化への疑 提示、そして2つ目は神の真の性 、そして日常生活における宗教の役割の理解に する取り みです。私の文化については、大半の人々が思う程には しいものではありませんでした。米国で育ち、それ以外の文化に しんではこなかったため、 烈な 、 まれた 匠、そして真理を するための正しい知 が必要とされました。米国文化は常に私たちへ五感の 足感で攻め立てるため、非常に 力なものです。私たちの人生に真の え ない供 をする者である神への崇 と信仰を持つことによって、そこから取り除かれない限りは、その制限を知ることは困 なのです。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/632>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。